

○自ら学び自ら考える子「なるほど」 ○お互いを認め合う子「いいね」 ○心身ともに元気な子「しっかり」

北大和小だより 1月号

令和5年1月10日
大和市立北大和小学校
〒242-0001 大和市下鶴間685
ホームページ <http://www.ed2.city.yamato.kanagawa.jp/s-kiita/>



「できていることを見て声をかける」

昨年、暮れの2学期終業式で、「年の暮れに別れるときに、よいお年を（お迎えください）と相手のことを想って挨拶します。」と児童に話をしました。下校時には「よいお年を」と口々に言いながら下校する姿があり、微笑ましく思いながら児童の下校を見送りました。新年を迎え気持ちも新たに、本日から3学期がスタートしました。今後も変わらず学校教育へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

さて、この休み中で手に取った本の一冊に「行動分析学」についての文献がありました。内容の一部を要約すると、課題のある行動、いわゆる問題行動について、問題行動のもととなる、その子にとってのメリットとデメリットは何かを見極めてそれらの条件を強めたり弱めたりするように環境を調整することで行動が変わるという話でした。

その中に次のような例がありました。すぐ奇声をあげ大泣きする幼児がいます。お母さんが泣き止むように笑顔であやして声をかけますが、泣き止んでもすぐに同じ行動になるのだそうです。どうしてよいか悩むお母さんに対して、行動分析学の先生は、「泣いたら離れる」「泣き止んだら近づいて笑顔で話しかける」これをやってもらったそうです。するとこの子の大泣きする回数が減り、穏やかに過ごせるようになりました。この子にとってのメリット・デメリットを見極め課題解決に向けて環境調整を行ったというのです。

この本を読んで「もしかしたら」と思うことがありました。学力学習状況調査のアンケート結果などから、本校でも約一割の児童に、いわゆる「自己肯定感が低い子」がいると示されています。もちろん自己肯定感が高く、生き生きと過ごして欲しいと私たち大人は望んでいます。しかし、もしかしたら、先程の赤ちゃんのお母さんの行動と同じで、私たち大人の行動が自己肯定感が低い子にとってマイナスの環境を作っているのではないかと考えたのです。

つまり、「できないことを見て」声をかけてしまうことが多いのではないのでしょうか。「できないから頑張れ」「頑張ればできるようになるはずだ」「こんなこともできないのか」などと。大人でも言われ続けたら苦しい言葉です。でも、誰もがつい良かれと思って口にしている気がします。考え方を変えて、「できていることを見て声をかける」ことを行うようにしたらどうでしょう。「そんなきれいごとを言っても」となりそうですが、せめてそのような環境を増やしてあげたらどうでしょう。自己肯定感が高まり「前向きな表情」が出てくるかもしれません。

「自分で考え行動すること」「自己責任を持つこと」、これから18歳で成人となり不安も多い世の中で、児童が今から成人までに身につけていってほしい力の源となる「自己肯定感」を、どの子にも持ってほしいと考えました。そのためにも「できていることを見つけて声をかける」こと。児童を見守る大人が意識して増やしていけたらと考えました。 校長